

論者記者

スーダン南部

新しい国造りに教育重要



ナイロビ支局長

古谷 祐伸
@ジュバ

舗装道路はほとんどない。年の半分は雨で交通が寸断される。発電機と給水車が、かろうじて都市の命脈を保っている。

3、4月に訪れたスーダン南部の中心都市ジュバは、そんな状態だった。数カ月後、南部はジュバを首都とする新しい国になる可能性が高い。

「おれはスーダン人じゃない。南スーダン人」。街頭に座っていた無職のおじさんは英語で力説した。看板やポスターには、国名候補の一つとうわさされる「新スーダン」の文字があげられている。

バシル氏が当選した4月の大統領選で、南部は完全ホイコッ

トこそしなかったが、形だけの参加にとどまった。南部がもつとも重視するのは、独立を問う来年1月の住民投票だ。キリスト教徒が大半の南部は20年以上、イスラム化を推し進める北部・中央政府と内戦を続け、2005年に結んだ包括和平合意で住民投票を勝ち取った。

南部では、かつての反政府組織、スーダン人民解放運動(SPLM)が自治政府を担い、その支持は熾石だ。スーダンの石油埋蔵量(推定67億バレル)の大半が南部に眠る。将来は明るそうにみえる。

ただ、反政府闘争、資源と腐くと、懸念も頭をよぎる。腐敗

と国民軽視。そんな停滞パターンがアフリカを繰り返されてきた。植民地支配から独立国が相次いで誕生し、「アフリカの年」と称された1960年から今年で50年。それが現実だ。

たとえば、60年に独立したニジェール。99年のクーデター後に就任したタンジャ前大統領は憲法の3選禁止ルールを強引に撤廃させた結果、今年に入って軍部のクーデターを招き、権力の座を追われた。世界有数のウラン産出国で知られるのに、1人あたりの国民総所得は330ドルにとどまる。識字率も低く、女性のそれは15%台だ。

停滞を生む二つの原因は、行き渡らない教育にあると思う。授業は無料でも制服やノートはお金がかかる。多くの子どもが学校に通うのをあきらめざるを得ない。このため、政治を監視

する能力が育まれない。政治家は資源頼みで国を運営すればよく、庶民の視線にならない。その意味で、初代大統領と自されるSPLMのキール議長が「我々の資源は若者。育成に重点を置く」と語っているのは評価できる。南部には内戦で満足な教育を得られなかった大人が多い。4月の選挙では、読み書きができず、多くの人が投票に苦勞していた。

日本のNGO、JENはジュバ郊外で学校を建設中だ。地元出身の作業員アンドリュース(30)は「我が子はどこで学び、将来を自分で決めてほしい」と話した。別のNGO、日本紛争予防センターは貧しい若者を対象に職業訓練をしている。国造りに欠かせないこうした支援活動が広がり、定着するよう願っている。

得ない。このため、政治を監視